

[課題演習抄録]

道徳的価値の自覚を深める道徳科学習 ーオープンダイアログ的活動を通してー

泉 翔 太

Shota IZUMI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：道徳科学習，オープンダイアログ的活動，道徳的価値，他者受容

1 研究の目的

これまでの道徳科学習について瀬戸(1989)は、「より高められた道徳的価値観に照らして、今までの自分の人間としての生き方，あるいは，人間としての在り方はどうであったかを振り返り，見つめる時間」と述べている。さらに，今回改訂された小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説特別の教科道徳編において，「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める時間」と示しており，これまでに瀬戸が述べてきたことが大切にされている。このことは，道徳科学習において教材の人物の気持ちを読み取るだけではなく，道徳的価値の自覚を深めることがより必要とされている。

そこで，この道徳的価値の自覚を深めるためには，自己の生活と道徳的諸価値又は教材と照らし合わせて思考を深め，ねらいとする価値に対する問題意識をもって道徳科学習を行っていくことが必要であると考えた。また，道徳的価値を個人のみで深めるのではなく，これまで以上に対話活動の中で深めていくことにした。さらに，対話活動の中でも，他者受容の要素を取り入れることに注目した。他者が考えたことの意図や背景を尋ねて本質を追求し合い，それらを他者発表する。そうすることで，道徳的判断力や心情の育成に留まらず，よりよい道徳的实践意欲や態度の育成にも繋がると考えた。

以上の考えをもとに，児童が主体的に道徳的価値を自覚するために，問題意識をもってねらいとする道徳的価値を追求していく中で，他者受容と自己受容を大切にしたいオープンダイアログ的活動を学習過程に取り入れた道徳科学習を構築していくことを目的とした。

2 研究の計画

時期	研究内容
M1 前期	研究構想，先行研究分析，先行研究
M1 後期	授業実践Ⅰ，授業分析
M2 前期	先行研究分析，授業実践構想
M2 後期	授業実践Ⅱ，授業分析，研究考察

3 研究の内容

(1) 先行研究

問題意識について疋田(2017)は，「問題意識をもたせることで，道徳的価値について主体的に自分との関わりで考えることができる」と述べている。そのためには，児童の実態を把握し，対象学級の問題意識に応じた教材分析・解釈や発問を工夫しなければならない。また，道徳的価値の自覚に迫るために，問題意識をもたせる発問の設定だけでなく，自他のよさを認め合いながら対話活動を行っていくことが重要であると考えた。このことについて畠中(2012)は，「他者感情への感性から視点取得，ポジティブおよびネガティブな感情の共有を経て，それぞれの感情に対応した他者志向的反応へと至り，向社会的行動につながる」と述べており，他者受容することはよりよい道徳的实践意欲や態度の育成にも繋がると考えた。

さらに，オープンダイアログについて Mary Olson(2014)は「当人やその家族が話を聴いてもらい，尊重され，認められたと感じるよう援助するためのアプローチ」と述べている。オープンダイアログは7つの原則がある。本研究では，この原則の中でも6と7のオープンダイアログの要素である『開かれた発問』・『傾聴』を取り入れた対話活動をオープンダイアログ的活動と位置付けた。『開かれた発問』については，多様な考えが

本音で話することができるように場や雰囲気づくりを工夫する。『傾聴』については、他者の考えを寛容的に受け止め、他者受容から自己受容が行えるようにツール作成や児童の特性に応じて以下(図1)の様な流れで話型を提示することにした。

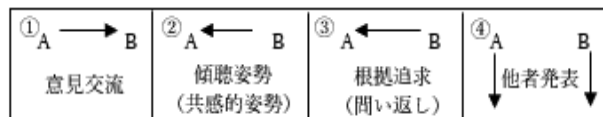


図1 オープンダイアログ的活動
(Olson, M, Seikkula, J. & Ziedonis, D.を基に筆者が作成)

(2)授業実践

①授業の概要

実施日	令和2年11月25日水曜日
実施校	福岡県 A市立小学校
対象	第2学年 38人
教材名	おれたものさし(東京書籍)
本時のねらい	「善悪の判断」：よいことと悪いことの区別を大切さに気付き、些細なことでも遠慮しないで行おうとする実践的態度を育成する。

②オープンダイアログ的活動を取り入れた学習プロセス

①活動の仕方(過程)	1【つくる】	2-1【はなす】	2-2【きく】	3【きめる】(意思決定)
②活動のねらい	追求させたい価値の動機付け・方向付け	ねらいとする価値の疑問と話し合いの必然性の共有	共感的な関係構築(他者受容→自己受容→自己表出の活性化)	ねらいとする価値のよさに気付き、道徳的実践意欲・態度の高揚
③活動の内容	①問題意識を類型化②意義・心得・根拠に基づく発問	①A → B A「私はかわいそうだから定規を渡したと思います。」 B「なるほど!」(傾きながら)赤鉛筆でメモ	②A ← B B「何でかわいそうだったんですか。」 A「ひろしが本当に泣いてしまうかもしれないからです。」 B「根拠追求(問い返し)」	①授業を通して考えた価値と、最終段階での考えを照らし合わせる ②焦点化した価値を各自で記述する
④活動の方法	①教師の発問 ②価値の称賛 ③傾聴への期待感(疑問をもつ) ④問題意識をもつ	①自己投影するような発問 ②自己の考えを記述 ③他者との比較	①他者との話し合い ②新たな考えをワークシートに記述する ③他者の考えを発表(発達・特性を考慮した話型の提示)	①本時を通して大切にしたい心(価値観)の焦点化 ②振り返りを記述(事前・本時・今後)

(4)授業の各段階における考察

【つくる段階】

「悪いことは悪いと言えますか」というアンケートを実施した。児童は「友達のために」「言わないと今後も同じことをする」等、善悪の判断の価値に迫る記述があった。一方、「やり返されるから」「言ったあとが怖い」など人間としての弱い心も見せていた。そこで「どんな心があれば、よい行いができるか考えよう。」というめあて(問題意識)を設定した。このように、児童の実態を基に話し合いをしたことは、本時の価値を追求する必然性を抱かせる上で有効であると考えた。

【はなす・きく段階】

導入で想起させた問題意識を基に、中心発問「ぼくがのぼるにものさしをわたしたとき、どんな心があったのでしょうか」を設定し、オープンダイアログ的活動を行った。以下は、抽出児A・Bの様子である(図2)。

A児は自己の発言を問い返されることで、考えの根拠が明確になった。一方、B児は自分と比較しながらA児の考えを受け入れ、自分の考えを加筆修正して、相手の気持ちを考えることの大切さを

を発表した。発表されたA児は、他者に受け入れられ、考えのよさに自信を抱くことができた。

図2 中心発問を基にしたオープンダイアログ的活動

このように、中心発問におけるオープンダイアログ活動は、互いの考えを深め合い、ねらいとする価値のよさを自分との関わりで捉えさせる上で有効的な活動であると考えた。

【きめる段階】

振り返りでは、善悪の判断の価値に迫る道徳的実践意欲・態度を引き出す項目を設定した。

以下は、善悪の判断に対する抽出児A・B児の変容である。両児とも、善悪の区別の大切さに気付き、実践意欲の高まりが窺える。

A児	中心発問	かわいそうという気持ちをもつ
B児	振り返り	だめなことをしている友達に注意したい。
B児	中心発問	おこられないようにする気持ち
A児	振り返り	友達でもだめなことはだめだと言いたい。

これらの結果から、他者受容と自己受容を促し、実践意欲や態度を育てるオープンダイアログ的活動は有効であったと考えた。

4 成果と課題

【成果】道徳的価値に対する自己中心性から脱却し、他者の考えを基に自己の考えを加筆修正する等、オープンダイアログ的活動を通して、道徳的実践意欲や態度の深まりが見られた。

【課題】根拠追求を行う場面において、他者の考えの背景を問うことへの理解が低かったため、学年に応じた手立てが必要であると考えた。

主な引用・参考文献

- Olson, M, Seikkula, J. & Ziedonis, D. 2014 . The key elements of dialogic practice in Open Dialogue. The University of Massachusetts Medical School. Worcester, MA.
 島中あゆみ 2012 共感性が向社会的行動に及ぼす影響—社会的望ましき尺度を用いて—富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要
 正田かおり 2017 滋賀県総合教育センター 道徳科プロジェクト研究 主体的に考え、他者と本音で語り合う「考え、議論する」道徳の実現を目指した授業づくり—児童生徒の問題意識を大切に学習を通して—